

## 「山行閑譚」

布引支部 藤原秀夫

光陰矢の如し。新型コロナウイルス感染症のパンデミックの中、瞬く間のうちに初夏を感じる時節となりました。間もなく梅雨です。国土レジリエンス(強靱性)の低下を突く災害の発生がこの時期、常態となっていますが、特に今年は勘弁願いたいものです。地震も然りです。感染症を収束させるためのニューノーマル基準の新常態と災害対策は基本的に矛盾するからです。災害時の感染症対策も、今冬にかけての再流行の対策も先手必勝の枠組みでお願いしたいものです。

閑話休題。2019年3月末の有馬富士の例会から入会させていただき、1年少々が経過しました。



福島大池より有馬富士を望む・平成31年3月

年度末の個人的な繁忙期の不参加を経て、3月1日の総会から再び精力的に参加をと思っていた矢先に今般の事態となりました。山岳団体も未曾有の苦難に直面する中、当会では、会長から当面の指針が示され、また会報が編纂されるとのこと、同慶の至りです。歴史ある登山会の会報に載せるほどの内容が、私にはあろうはずもないのですが、原稿がまだ少ないとの情報提供を側聞し、取り敢えず協力させて頂くことにしました。私の山行の話など、歴戦の強者からすれば、閑談に過ぎない。検証なしの個人的な追憶になることをご海容下

さい。

私の山行の端緒を開いたのは、大学院時代の25歳の時の立山の夏山登山でした。登山を趣味とする先輩が何と室堂の山小屋で研究会を開催しました。建設会社に勤めた経験のあった先輩の案内で、黒部峡谷、黒部ダムを案内していただき、ここを拠点に、主峰の登頂を目指しました。先輩の背中 of 逞しさを眩しく眺めながらの集団登山でした。初心者には厳しい洗礼でした。



黒部ダム (イメージ写真)

1976年27歳から古都京都で奉職し、その関係で、著名な歴史学の泰斗が主催する登山会に入会しました。この登山会は、京都の北山連峰登山を通常例会とする会でした。北山講という団体名が付いており、頂上で昼食をとりながら講元の歴史学研究の「講話」を聴くことも魅力の一つでした。正会員15人程度の少数の絆の会でした。



愛宕山遠望 (イメージ写真)

会の例会は月最低1回で、年2回ぐらいは、愛宕山登頂から水尾の里へ下り、民宿で地鶏

水炊きの宴席を囲むというのが慣例でした。柚子の香り懐かしいこの会に10数年在籍した関係で、北山連峰登山の経験を積むことができました。この間に、たまに六甲で例会をするときには、私が案内することになり、大見得を切った手前、事前に六甲山頂と周辺の山々には下見でよく登りました。



六甲山最高峰（931.3M）平成31年3月撮影

個人的には、自然と関西近郊の山々への登山に広がっていきました。北摂の、中山、大峰山、から大阪の生駒山、交野山、それから、天王山、十方山、大和三山、金剛山、実家の墓のある高野山などへと広がっていきました。夏休みには、国内遠征することもありましたが、日程が合わず大抵は有志で行くことになりました。よく登ったのは、乗鞍岳、白馬、などでしたが、乗鞍は、先輩が乗鞍高原に別荘を持っていたので、そこが拠点でした。白馬は、近隣の飯森村(当時)にある親しい民宿が拠点でした。東北の蔵王では、いつも峩々温泉の一軒宿を拠点にし、長く逗留して登頂しました。蔵王山頂から観る雲が織りなすアートとの出会いは山での僥倖の一つでした。



蔵王（イメージ）

北海道への遠征もありました。ニセコ五色温泉という一軒宿(当時)を拠点に、ニセコのアンヌプリ、イワオノプリなどを踏破しました。特にイワオノプリには、数度登りましたが、はげ山が多く道が鮮明でなく最初の登山で迷って彷徨しているときに、突然、視界に小さな池が現れました。美しい透き通った青の小宇宙に魅せられ、静寂の中、暫し茫洋とした景観に浸りました。地図で幾度も確かめたのですが、載っていなかったのです。その後も探したが見つからず、いまだにミステリーです。帯広の忠類村(当時)という過疎の村に一ヶ月ほど逗留し、十勝岳を、熊との遭遇を恐れながら、地元のガイドの案内で挑戦しました。九州では、大分の森厳な由布岳とその周辺の山々によく登りました。夜行のブルートレイン、特急富士で小倉に行き下車して細川忠興公の小倉城と隣接する松本清張記念館を訪れるのが定番コースでした。乗り継ぎで、大分駅到着後、少し離れた行きつけの寿司屋で閑さば閑あじで舌鼓を打ち、拠点は、華やかな湯布院を避け放浪の俳人で著名な種田山頭火ゆかりの地の鄙びた湯平温泉の老舗の旅館でした。



イメージ

写真

私の山行は、20代40代初めまでの登山会に参加した時代と、それ以降の単独行を中心とした時代に分かれます。40代半ば以降は、武蔵五輪書を気取って独行道となりました。登山会に属していた時も、奴雁を自称し、大体、登山後の宴会雑用係を務め、山行のリーダーとなることは六甲以外は極力辞退しました。山に入ればいつも自然の悠揚たる佇まいを観

ながら清浄な空気を体内に取り込むことに注力しました。山に入る目的は、無ならず空の小世界を創ることでした。還暦を迎えた頃から、家族ばかりでなく、友人からも単独行を危険視するアドバイスが多く寄せられるようになりました。吉野会長の仰る、常に初心に戻り、一步一步を大切に登るといふ山行の原点、にたどり着かなければならないと思うようになりました。先日、1700メートル級の日帰り登山での遭難から生還した方の経験が新聞に載っておりました。下りの分岐した道で登ってきた通常のルートと違う魔境の道へと誘惑され、途中のザラ場で滑り滑落し一週間ほど生死を彷徨う魔界に突き落とされたとのことでした。瞬間の焦りが滑落に繋がる典型とのことでした。通常のルートから外れているという意識と下山時間に遅れていることが瞬間の場面で冷静さを失わせたようです。最近、私も、通常のルートを外れて、下山時間を日没後に設定しヘッドランプをつけて走行し冷静さを失わない訓練としています。過日、生瀬ルートで六甲山頂を目指した方が滑落遭難しました。同じルートで山頂を目指しましたが、こんな身近に油断すれば危険な場所があることを改めて気付かされました。今後、吉野会長が提唱されている精神を学び、いついかなる時も冷静さを失わない強靱さを持って、山行を続けたいと念願しています。やはり、短歌で、冗長な拙文の筆を擱くことにします。今年の大河ドラマは主人公を象徴するように様々に不運です。明智光秀の三女、細川忠興公正室の細川ガラシャの辞世の歌はよく知られています。この歌への私の返歌を挿入しました。

散りぬべき時知りてこそ 世の中の花も  
花なれ人も人なれ (細川ガラシャ)

枯れるのは早き人なれ 草となり地を這い繋

## げたぶれところを (自作)

令和2年5月16日 記